

安全・安心な村づくりに向けて

■ 渡部 秀勝* ■

1. 戸沢村の概要

日本三大急流の一つ「最上川」。その最上川流域で最も風光明媚な景勝地が最上峡と呼ばれています。その最上川で、船頭が歌う最上川舟唄に手拍子を合わせ、樹齢千年を越すと言われるタコ足状に幹分している天然スギ（通称「山ノ内杉、神代杉」）とブナなどとの混交林や日本の滝百選「白糸の滝」を始めとした幾多の滝が織りなす最上峡の春夏秋冬、四季折々の移ろいを愛でる川下りは、「最上川舟下り」として山形県の観光ルートにも名を連ねています。村の地名がわかってもらえないときでも“舟下りの村”と言えば案外知られているようで、昭和58年放映のNHK朝の連続ドラマ「おしん」ブームに沸いたときの30万人を超えた入込者は、



山ノ内スギ（村の木）



現在10万人台で推移していますが、今も本村観光の中心を担っています。

本村は、山形県の母なる川「最上川」が村内中央部を貫流し、山形県を人の横顔に見立てたときにその頬骨辺りに位置しており、面積261.31 km²のうち林野面積が8割を超え、さらにその大半を国有林が占めていま

す。その様な環境の中、村内を流れる最上川、鮭川及び角川流域沿いに38集落が散在し約5千人が生活を営んでいます。また、本村は昭和30年4月に3か村が合併し、平成27年に村制施行60周年を迎えたところですが、人口は最大1万人を超えていたときと比べ半減しており、ご多分に漏れず人口流失に加え少子高齢化が進み、交流人口の拡大から定住対策を見据えた産業振興が大きな課題となっており、村民はもとより外部の皆さまの力添えもいただきながら総力を挙げて立ち向かってい



最上峡と舟下り

*Hidekatsu Watanabe 山形県戸沢村長

くことを決意していると
 ころです。困難な道のり
 であることは覚悟してい
 るものの、どんなに大変
 でも変えていけないのは、
 悠久の時の流れを刻む最
 上川を始めとした山紫水
 明の豊かな自然景観とそ
 の恵みへの感謝、素朴で
 暖かな住民気質であり、
 それらは天から与えられ
 た優れたプレゼントとして一層、暮らしや村づく
 りに活かしていく姿勢を持ち続けることだと思っ
 ているところです。



ヒメサユリ
 (村の花、当村が北限地)

2. 地形的特性及び気象と災害

資料によれば、本村は出羽山地にあって地形的
 に新第三系中新世以降の堆積岩地帯の中にあると
 言われています。平地は村の東北部で鮭川下流域
 の作る氾濫原、河岸段丘や最上川、角川流域に僅
 かに見えるに過ぎません。山岳地形は南部に千m
 前後のやや急峻な山地を形成し、北に向かって少
 ずつ高度を下げ、最上川を境に再び高さを増し
 ていきますが、河川系に沿った山嶺をなし、沢の
 奥深くの急峻な山からなだらかな丘陵に至るまで
 多様な様相を呈しています。河川は村をほぼ東西
 に横切る最上川とこれに南北より流れ込む樹枝状
 に広がった支流群より成り、各河川の方位は南北
 方向に流れるのが一番多いものとなっており、堆
 積岩の基盤構造やその走向、傾斜がケスタ地形
 (一方がガケで低地に落ち込み、他方はゆるやか
 な斜面になっている非対称的横断面計を示す丘陵
 で硬軟両岩の互層から成る)を作り、山嶺や河川
 の流路を形成、また角川流域には軽石流堆積物が
 厚く分布し、これらの複雑な地形と地質が多くの
 地すべりや崩壊地形をもたらしています。

県下に降った雨は最上川に注ぎ最上峡に集中す
 ることから、特に7月から8月にかけての集中豪
 雨では過去に多くの水害に見舞われました。加え
 て、全域が特別豪雪地帯の指定を受ける本村に

あっては、冬季間2m以上の積雪となり、この雪
 が融雪期における河川の増水だけでなく、土砂崩
 壊や地すべりを誘発する一因ともなっていること
 から、本村における大規模土砂災害は、地下水型
 の「地すべり」といわれているようです。

3. 度重なった水害の歴史

本村の大災害としては、「水害」を抜きにして
 語れません。

本村中部の古口地域は、古くから度重なる水害
 に悩まされた水害常襲地であり、まさに古口の歴
 史は水との闘いの歴史でした。役場庁舎が置かれ
 ている古口地区は、最上峡谷の左岸に位置し、上
 流に最上川水系の砂子沢、下流に角川の両支川に
 挟まれており、また鮭川の合流点下流に位置する
 ため、内陸部の降雨による被害と、鳥海山系の降
 雨による鮭川の洪水による被害との二重の被害を
 被ってきました。その回数は、天和2(1616)年
 以降の明らかなものでも約30回に達すると言わ
 れています。特に昭和19年の水害は、記憶に残る最
 大の大洪水として伝えられてきました。この大洪
 水についての記述をみると、山形県一帯で記録的
 な大豪雨となり、特に最上川中流部に位置する最
 上地方の350mmを最高として、最上川水系の全河
 川で警戒水位をはるかに突破する大出水となり、
 その水位記録としては古口で警戒水位5.00mのと
 ころを8.95mと「既往最高」を示したとされ、地
 元新聞の見出しでも「最も大きい古口の被害」と
 記されました。



古口大水害(昭和44年)

また、昭和33年7月28日から29日の大洪水においては、「本村全域を泥土の湖と化し、莫大な被害を与えた」「濁水いまだ引かぬ30日、神町駐屯の陸上自衛隊は災害救助法の発動による県知事要請により、急きょ災害現場に駆け付け」防疫や地すべりの除去、道路の応急復旧にあたった、と当時の村広報誌に掲載されています。

4. 治水、地すべり対策の歴史

このように、しばしば大水害に見舞われてきた本村にあっては、治水対策は村民の切実な願いであり、特に古口地区における築堤は長年の夢であったことから、国など関係機関に機会あるごとに陳情してきた結果、昭和39年の用地買収から8年を要しましたが、築堤完成及び排水ポンプ場配備により、ようやく洪水の恐怖から解放されたことを当時、実感したものでした。現在は改修工事により堤防は一新され、付近住民の散策や、その



古口堤防



平根地すべり（昭和45年）

一角から眺める最上峡が最上川ビューポイント選定地にもなっていることから、古口堤防は違和感もなく景観に溶け込んでおります。

また、本村の多くの区域が複雑な地形と地質により土砂災害危険箇所となっており、これまでも国直轄地すべり対策事業として、2地区で大規模な工事が行われてきたところです。このうち平根地区は明治の頃からの記録に残っているだけでも、宅地や耕地、県道等に段差や亀裂が生じるなど度々、地すべり災害による大きな被害を受けてきたことから、山形県の対策工事を経て、昭和46年度に建設省（当時）から「平根地区地すべり対策工事直轄施工告示」がなされ、以来38年の歳月と巨費を投じていただき平成20年に完成をみたところであります。一方、黒淵地区は宅地被害等だけでなく、県内内陸地方と庄内地方を結ぶ主要幹線道路である国道47号が陥没して全面通行止めに陥ったこともあり、昭和54年から平成16年に渡り対策工事をしていただきました。

現在は両地区とも地すべりの発生が見られないことから民生安定に繋がっているだけでなく、黒淵地区では土地の安定化による有効活用として、地域活性化施設（道の駅）「高麗館」が平成9年にオープンし、また、最上川と幽玄な高麗館のマッチングによる交流人口の拡大や地域経済の起爆剤として、昨年（平成26年）と本年“最上川ミュージック花火”を開催し、多くの皆さんに足を運んでいただきました。これもひとえに国を始め関係各位のこれまでの地すべり対策の成果によ



黒淵地すべり対策施工地に建つ「眺河の丘 高麗館」



砂子沢川道閉塞と通水対策

るものと深く感謝申し上げるところです。

平成27年4月、融雪によるものと思われる土砂崩れにより最上川水系砂子沢川の閉塞報告が地域住民によりもたらされ、直ちに村職員による現地調査を行ったところ、山腹崩落による河道閉塞と天然ダム形成を確認し、ダム決壊による下流部被害を防止すべく関係機関に対応を依頼したところ、関係機関からは調査から水位低下対策や通水確保、土砂流センサー設置など迅速に動いていただき、地域住民はもとより村としてもひとまず安心感を持つことができました。

5. これからの災害対応に向けた主な取り組みと決意

各地で起きている大災害を見聞きする度に防災、減災の必要性については思うものの、本村は近年、大規模な自然災害に見舞われたことがないため、住民の危機意識に差異があるのが実情であり、また、何かにつけて国や県に頼る傾向が強いのも事実です。規模の大小に関わらず災害が発生したときに村だけではなんとかならないことは多々あることは確かですが、村や村民が出来ること、やらなければならないことはあるわけで、自主防災組織の

全集落での完全設立と防災訓練の強化継続により、防災組織自らが主体的に防災・減災意識の高揚を図ること、戸沢村ハザードマップや地域防災計画の改訂により、大災害の発生が予測されるときには“まず避難する”ことを基本としながらも、気象情報等を正確に受け取り、それを検討しながら、どう避難に結び付けていくのかなど、まだまだ暗中模索が続いておりますが、災害対応を村全体で共有化していくことを課題に据えて“安全・安心な村づくり”を進めてまいりたいと考えておりますので、関係各位におかれましては、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます次第です。



戸沢村イメージキャラクターせんどう君